

され、力説されている。その後に電磁気学や相対性理論や量子力学がつづく。この最後のところで例の観測の問題というやつが出てくるのであり、不可逆性とも結びついているのである。

ところで、天文という学問にかぎらず、「科学を論ずる」ことが活発におこなわれる時代が再びおとずれたようである。しかし現在の科学史等の隆盛はある面では“復刻”の流行として現象しているといえる。1960年代に学生生活をおくり、科学技術論や方法論や科学史のサークル的な勉強に心魅かれたような人であれば、古本屋まわりをして苦勞して1930~40年代の文献を入手した経験をお持ちであろう。もっとも古本屋まわり自体がまたひとつの楽しみでもあった。しかしそうした文献も1970年代のいま、新しいよそおいのもとに書店の店頭でけっこう見かけることもおおいのである。この本は、昨年に国際時間学会第2回世界大会というものが日本で開かれたということもあって、科学ジャーナリストが戦争中の雑誌連載論文を掘り出してきて単行本として完成させたものだそうである。かつての時期のせつかくの貢献と成果を現代に生かすことは意味あることとおもわれるので、とくに出版事情の悪かった時代でもあったから、こうした仕事は大切なことではないだろうか。

天文関係のわれわれのひたっているふんいきの内には、およそ「論ずる」ことをきらい、職人的な仕事に限定されねばならない、という思想があるかもしれない。だから“時間”というカテゴリーの全体を問題にすると、いう、“共通の知識人としての立場からお互いに語りあう”(本書)という、姿勢はかえって興味ぶかい。天文ではオーバードクター問題が深刻化しているので大学関係ではまだしも可能性のありそうな就職市場にどんなものがあるかということにしぜんと敏感になるのであるが、大学教養課程での科学史・科学論関係(これは時勢の反映として学生の要求の強いことが根本にある)というのが結構耳にはいつてくるのは皮肉である。たしかに「論」と名がつけばたちまち騒々しいことは発生しそうである。この本の著者は戦時中の理化学研究所で、一方の雄、武谷三男と同居して常にぎやかな論争をやって、“理研アトラクション、渡辺慧とその楽団”と称せられたというエピソードがある。また戦後すぐ“原子党宣言”なる文章を発表して議論をまねいたそうである。

(横尾広光)

◇ ◇ ◇

## 雑 報

### 太陽電波10メートルパラボラアンテナとりこわし

東京天文台太陽電波の10メートルパラボラアンテナは昭和28年建設以来働いて来たが、野辺山太陽電波観測所開設以来予備役に編入されていた。しかし最近老化甚だしく危険となったため昨年末解体され1山のクズ鉄となってしまった。

建設には三菱重工、東京計器、大阪動力、林建設等の技術者、また畑中先生の下に、守山さん、赤羽さん、鈴木さん等々の多くの人々および相当の年月をかけてつくられたが、解体はあっけなく、1台のレッカー車と数人の人手で数日で終わってしまった。

この10メートルパラボラでの観測装置は全て手作りで3000MHzを赤羽さん、201MHz偏波計は鈴木さんが作られた。其の後土屋さんが227MHz、328MHz、408MHz、612MHzの4つの偏波計に改修、観測を続けて来たが低い周波数に於ては混信が増加し精度が低下する一方であった。

尚建設当時今の松林はまだ小さく「坊主」のトラを留めるには役立たず近道の時にまたいで通るほどで、木造の研究室のそばのポプラも赤羽さんが当時に植えたはずである。

(渋谷暢孝)

## 掲 示 板

**SAM 研究会集録**：昨年12月に行われた第12回 SAM 研究会(恒星系力学)の集録ができました。希望者には500円(送料共)でお願致します。下記へ御申し込み下さい。

京都市左京区北白川追分町

京都大学理学部宇宙物理学教室

今川文彦 Tel. 075-751-2111 (内線 3896)

**月惑星シンポジウム開催のお知らせ**：第7回月惑星シンポジウムを次のように開催します。

期日：昭和49年7月11日(木)~13日(土)

場所：東京大学宇宙航空研究所講堂

講演を希望される方は、講演者(所属・身分)、題目、講演要旨(400字以内)を6月8日(土)までに下記世話人宛お届け下さい。

東京都目黒区駒場 4-6-1 (〒153)

東京大学宇宙航空研究所

清水幹夫 Tel. 03-467-1111 (内線 404 or 495)